

漢語オノマトペの日本語における受容と変化  
—日本語史的観点からの調査から・共同研究中間報告として—

宮 武 利 江  
(調査協力：権景愛)

**Adaptation and change of the Japanese onomatopoeia  
with Chinese characters**

MIYATAKE Toshie

The writers perform a collaborative investigation of onomatopoeia with Chinese characters continuing on from last year. It compares the fixed situation and the phonetic and semantic changes in both the Japanese and Korean languages that received Chinese vocabulary. The purpose is to mention the differences of both, and to finally gather up as a contrast dictionary of Japan, China and South Korea.

This report extracts examples of onomatopoeia with Chinese characters collected in “the Chinese word onomatopoeia” of “the Japanese onomatopoeia dictionary” from the documents recorded in “the complete series of Shinnihon classical literature”, and then takes up some interesting words in comparison with use in Japanese in the present age and mentioned in the entry of “Nippoijisho” (Japanese-Portuguese dictionary) and Waeigorinshusei (Japanese-Englidictionary). This is the interim report of the study.

A Japanese sentence of the Heian era has few onomatopoeia with Chinese characters. We could confirm that the same kind of usage was being used in a war chronicle, and a lot of onomatopoeia with Chinese

characters were used in Noh songs and in Edo literature such as the work of Chikamatsu.

For example, [滔滔 (Tōtō) / 蕩蕩 (Tōtō)], is illustrated in the “Japanese onomatopoeia dictionary” as a word with different meanings. However, “蕩蕩” in a Japanese sentence has no precedent, and the use that is synonymous with “滔滔” in a Japanese sentence in the Japan Chinese poetry sentence is seen in the Edo era. [蕩蕩] is not firmly established in Japanese, and [滔滔] is a word to express water flowing like a brick formerly, but in the Edo era it begins to be used for a description of the state in which a person speaks without stagnancy figuratively, and it is thought to be a word recognized as onomatopoeia by the present age.

## 1. はじめに

日本語において、オノマトベ語彙はその種類の豊富さに加え、音声・形態的パターンや歴史的変化など、興味をそそる側面を多く持つ対象として、これまでに数多くの研究がなされてきた。辞典類も10種ほどが出版されており、分類整理は進んできている。

しかし、その中で漢語由来と思われるオノマトベについては、漢字の意味を持ったまま副詞的に用いられている場合にオノマトベと認定できるのかという問題があり、また、和語オノマトベとの境界が判然としなないものがあるなど、取り扱いが難しい。そのため、従来多くの辞典では積極的に収録していなかったり、参考程度に注記したりという程度の扱いである。それでも、近年、軍記物語等を中心に、漢語オノマトベと和語オノマトベとの関わりを明らかにしようという研究（中里2005・2006、劉2004など）が発表されており、少しずつその実態は明らかになってきているといえよう。

数年前から日中韓の3ヶ国の研究者で共同研究を行う機会があり、昨年から3言語を繋いだ研究テーマとして、この漢語オノマトベをめぐる問題を取り上げてみようということになった。中国語語彙を受容した日本語と韓国語、両言語におけるその定着状況と音声的・意味的变化を比較して、両者の違いに言及すること、また、最終的には3ヶ国語の対照辞典としてまとめることが目的である。

筆者は、そのうちの日本語を対象とする部分を担当する。本稿は、近世以前の日本語文献から漢語由来と思われるオノマトベの用例を抽出して検討し、漢詩文として日本人に享受された表現の中から、日常的な語彙として日本語の中に取り込まれていく過程、場合によってはどのような形態的・意味的变化を起こして現代に至っているか—を明らかにしようとする研究の一部で、2014年10月に文教大学で開催された「日中韓言語・文化に関する国際学術シンポジウム」で行った発表に、その後の検討結果を加えたものである。

## 2. 「漢語オノマトベ」の定義

### 2.1. 辞典類

中里(2006)でもまとめられているように、2000年以前に出版されたオノマトベ辞典では、見出し語として掲げられている漢語オノマトベは非常に少ない。東京堂出版の『擬音語・擬態語辞典』(1974)は解説で「漢字書きを本体としていた漢語は、特別のもののほか、擬音語・擬態語としないことにした」と述べ、漢語オノマトベを収録していないし、「この辞書では、和語のものをもっぱら取り扱う」とする角川書店『擬音語・擬態語辞典』(1978)や、特に断りのない創拓社『擬音語・擬態語使い方辞典』(1993)にも、漢語オノマトベはほとんど見られない。2003年出版の山口仲美『暮らしのことば 擬音語擬態語辞典』(講談社)

では、やや様相が変わり、見出し語にはあまり取り上げていないが、たとえば「ごーごー」の項末には「参考」として、「似た意味の漢語で、とどろきわたる音を表す「轟轟」という語があり、戦前は車輪の音などを表すのに用いられた。」という注記があり、紹介はされている。しかし、「こつこつ」には漢語の「兀兀」との関わりも考えられるが、この項には「参考」は掲げられていない、というように、その指摘は部分的である。これに対し、東京堂出版『現代擬音語擬態語用法辞典』（飛田良文・浅田秀子・2002）は、見出し語に漢字表記を示したり、「喧々囂々」などの四字熟語例も含めて扱っており、見出し語以外の「参考」部分での言及も多い。

さらに、2007年に小学館から出版された、小野正弘『日本語オノマトベ辞典』は、日本語のオノマトベには漢語由来のものが数多く存在する、という見方に基づき、「漢語オノマトベ編」を付録として225語を取録する。ここでは、「こんこん」は和語としては擬音語、「昏昏と眠る」「滾々と湧き出る」「懇々とさとし」は擬態語、と述べる一方で、「ごうごう」は固有の日本語か漢語か、擬音語か擬態語かの線引きが難しい語であるとの認識を示し、特にその点を追究することはせずに（それゆえ別掲の形を取って）、「漢語の修飾表現のうち、（中略）豊語を選んで」網羅している印象を受ける。とはいえ、「～然」「～乎」などの接尾辞を含む語は除外しており、漢語オノマトベの可能性のある語すべてを取り上げているわけではない。

## 2. 2. 先行研究

漢語オノマトベの存在自体に言及した研究としては、「日本語のオノマトペーの特色として、（中略）漢語系の描写語が、たくさん見られる」とした田中（1978）や鈴木（1978）があるが、同時期に出版された金

田一春彦の『擬音語・擬態語辞典』(1978)では、「擬音語・擬態語概説」において形式に基づく分類を行っており、漢語オノマトベの基本的な一覧として参考にできる。ここでは、まず漢字一字～四字に大分類され、二字のものはさらに、修飾語を作る接尾辞のついた6種(「一焉」「一乎」「一爾など)・「同じ語根を重ねたもの(=疊語)」・「同じ子音の拍を重ねたもの」・「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」の9種に細分されている。しかし、実はこの分類は、古典中国語、古くは『詩経』にそれらの用法が見られるとして、頼(1964)が解説しているものとほぼ一致する。頼(1964)は、詩経や文選の詩から一字～四字のオノマトベの例を挙げ、「擬態語にしても擬声語にしても、「如」「然」などの接辞を添えてはつきりと他と区別することもあるが、必ずしもそれは普遍的ではない」と述べた後、二字熟語のそれぞれの漢字の「声」(頭子音)が同じものを「雙声」、「韻」(頭子音を除いたもの)が同じものを「疊韻」、さらにそのどちらでもある「疊語」(同音反復)とを紹介し、「擬音語や擬態語は雙声や疊韻であることが多く、更にその徹底した形ともいえる疊語の場合も多い」と述べている。金田一の言う「同じ子音の拍を重ねたもの」は「雙声」、「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」は「疊韻」にあたり、分類基準は同一である。また、劉(2004)も、二字漢語オノマトベを同じ基準に従って「重言型」(=疊語)・「疊韻型」・「双声型」・「接尾辞型」に四分類している。

角岡(1993)は、筧(1986)を踏まえて、漢語起源で現代の日本語語彙として定着しているオノマトベを「擬似オノマトベ」と称した。そのほとんどは擬態語で、角岡(2007)では「重言(反復)・疊韻(脚韻)・双声(頭韻)のいずれかの韻律的特徴を有し、日本語本来のオノマトベと類似の語感となっていること」を原則として、漢字2字の語を重言21語、疊韻4語、双声4語、漢字4字の語を〈重言×2〉20語、〈名詞・

形容詞＋重言）20語、〈名詞・形容詞＋双声・疊韻〉10語、あわせて79語を具体例として挙げ、音韻・形態・正書法の観点から論じている。角岡の言う「重言」は疊語であり、結局この分類も先の二者と同一、一字のものと接尾辞のついたものを扱う対象から除いているのみである。

呉川（1990）は、森鷗外15作品と夏目漱石13作品の漢語オノマトペを分類整理しているが、その際、「もともと中国語の中でオノマトペとして使われ、その後日本に伝わり、日本語の中に取り入れられた、いわゆる漢語のオノマトペ」として、「聯脛詞」3種（①双声語②疊韻語③重言（または疊字））と「一字の擬音語の後に「～然」「～如」のような接辞をつけて、物事の様子や状態を表したり、形容の後に「～乎」をつけて、強調の意味を表したりする」もの、「もともとは中国の擬音語で、後に和語のオノマトペの当て字として用いられるようになったもの」（「颯」「轟」など）を挙げ、「漢語研究の一分野として取り上げる価値が十分ある」としている。これも、金田一の分類と変わらないが、作品から抽出した実例一覧を見ると接辞型が多く、「聯脛詞」は①②（併せて「熟語型」とする）19語、③20語、四字の疊語型が5語と、角岡の例より少なくなっている。

中里（2006）は、オノマトペ研究における漢語オノマトペの重要性を訴えながら、その範囲を「広義には、漢語由来のオノマトペすべてを含める。狭義には、漢語のオノマトペの語形のうち、日本語のオノマトペの語形に重なる疊語形式のものを言う。」とまとめているが、「漢語オノマトペ」の認定が本来の中国語での使用に基づくのではなく、日本語内での使用（受容）に基づくようで、定義がはっきりしない。漢語由来のオノマトペのどれを日本語のオノマトペと認めるかどうかという点では、A) 漢字表記の意識が薄れたもの、B) 動詞との結びつきが強く、言語音と意味内容に有縁性があると感じられるようになったもの、を基準と

しようとしているが、この場合完全に「日本語のオノマトペとして定着した」という語彙の抽出に関わるものとなる。

なお、劉（2004）は、「重言」型オノマトペ「AA（ト）」の使用状況を歴史的に概観して、21語計390例が各時代を通じて多く現れることから、日本語においては漢語オノマトペの中で「AA（ト）型」の受容が進んでいることを指摘している。中でも、「茫々」「颯々」「悠々」「濛々」の四語を取り上げ、それらの意味変化や固有語オノマトペとの関係、また表記の問題などを論じている。これは本研究にとっても有用な示唆を多く含む論である。定義・分類に関する問題とは別に、一連の中里の研究（2000/2001/2005/2006/2011）にある個々のオノマトペに対する論究も併せて今後参考とし、研究を進めていきたい。

### 2.3. 本研究の立場

以上、大まかにこれまでの「漢語オノマトペ」の認定や分類の規範について見てきたが、今回の研究では「もともと中国語のオノマトペが、漢詩文として日本や韓国で享受された結果、どのようにそれぞれの言語体系の中に組み込まれて変化していったか、または取り入れられずに消えていったか」をたどることを目的とするので、できるだけ対象範囲は広くしておくことが望ましい。とはいえ、オノマトペであるという認識のもとに用いられているかどうかが不明な語について、逐一それを検討しながら調査していくのは非効率的であると考え。現代日本語では、「接辞型オノマトペ」はオノマトペと認識されにくく、したがって最近の辞典類でも取り上げられることはほとんどない。研究の進展につれて検討すべき場合が生じてくる可能性はあるが、現時点では「重言（疊語）」を中心に少数の疊韻・双声を加えた、『日本語オノマトペ辞典』の「漢語オノマトペ編」に収録された語彙を、一つの基準として扱うこ

ととする。

### 3. 日本古典文献中の用例

#### 3.1. 用例収集と比較

前節に述べた理由に基づき、『日本語オノマトペ辞典』『漢語オノマトペ編』見出し語について、

- (1) 小学館・新編日本古典文学全集（ジャパンナレッジ版）所収の作品における用例を抽出
- (2) 古辞書類のうち、色葉字類抄・書言字考節用集・日葡辞書、（参考として明治初期の和英語林集成）の記載の有無を確認
- (3) 結果を現代語における用法と比較

という手順で検討していった。結果は一覧表として作成したが、膨大なため今回は掲載しない。先行研究があるもの等、何例か興味深いものを選んで以下に取り上げてみる。

#### 3.2.1. 「<sup>しんしん</sup>深深・<sup>しんしん</sup>森森」

『日本語オノマトペ辞典』では「深深」と「森森」を別項とし、前者に「奥深く静寂なさま。ひっそりと静まりかえっているさま。」、後者に「①樹木の高く深く生い茂ったさま。また、樹木のように、高く並びそびえているさま。②奥深く静寂なさま。」という解説を加える。

常陸国風土記（721）：「(さまざまの木々が) 往々森々自成山林」

→「茂る」の意

平家物語（13c）：「深々として山ふかし」

→「静寂なさま」か「生い茂ったさま」か不明

海道記（1223）：「森々たる林を分けて」

→「静寂」か「茂る」か不明



謡曲 (15c) : 「露深々と古 (降る) 塚の」 (井筒)

→ 「静寂」か。「露」だが、「ふる」にかかり、現代の「雪がしんしんと降る」に繋がるか。

狂言・大黒連歌 (14 ~ 15c) : 「しんしんとした殊勝 (さう) なお前ではござらぬか」

→ 静かなさま

おくのほそ道 (1702) : 「高山森々として」

→ 頭注では「茂る」とするが、現代語では「森々として静まり返っており」とあり、「静寂」か「茂る」か不明

いまみや草 (1808) : 「聖廟木の間に森々として」

→ 「静寂」

近世説美少年録 (19c 前) : 「緑樹森々」 (左訓・ミドリノキフカクシゲル)

→ 「茂る」

日葡辞書 (1603) : 「Xinxinto xite. ただひとり黙って静かにしていること. 例, Xinxinto xiteiru. ¶ Xinxinto xita tocoro. 静かでもの寂しい所.」

和英語林集成 (1867) : 「SHIN-SHIN-TO, シンシント, 深深, adv. Quiet, retired, solitary, lonely. —*shita tokoro*, a retired, or lonely place. Syn.SAMUSHII」

「静寂」の意は「深深」「森森」どちらにもあり、また、平家の用例では「深々」も樹木の茂るさまの形容とも解され、両者の区別は判然としない。狂言には仮名書きの例があるが、他例が自然に対して用いているのと異なり、人間が厳かな雰囲気ではまっているような場面で使われていて特殊である。中里 (2005) によると、近世でも「しんしんと夜が更ける」という例が多いということだが、もとは人気のない山中の静けさなどを言ったものと思われる。しかし、現代語では雪の降るようす

と夜の更けるようすを表す用法にほぼ限定されている。なお、「深・森」と「閑」を組み合わせた「深閑・森閑」の語もあるが、今回調査した作品中には漢字書き例が見当たらず（日葡と書言字考には収録）、川柳に「しんかんとして禪のしらみを見」という仮名書き例があったのみである。

### 3.2.2. 「<sup>ぼうぼう</sup>茫茫」

『日本語オノマトペ辞典』の語義解説は「①見た様子がぼんやりとしてはっきりしないさま。かすかなさま。②草や髪などが多く乱雑に生えているさま。」となっているが、はっきりしない様子を表すと考えられる用例はほぼなく、現代語の「草ぼうぼう」の意の用例は太平記に1例、謡曲に2例しかない。

和漢朗詠集（1018）：白居易「秋水白ウシテ茫茫タリ」

→はてしなく広がるさま

日本漢詩集：菅家文草（900頃）：「茫茫トシテ一水深キ」

藤原公任（966～1041）「四面茫茫トシテ」

具平親王（964～1009）「茫茫タル天道ノ理」

村上冬嶺（1624～1705）「心事渾テ茫茫タリ」

→頭注「繁雑なさま」

細井平洲（1728～1801）「茫茫タル天地ノ間」

→果てしないさま

平家物語（13c）：「天水茫茫として」→はてしない

「浪も茫茫たり」→激しい

太平記（14c）：「天水茫茫として」「白波茫茫として」

「烟水眼に茫茫たり」

「逆浪岸を浸して茫茫たり」→激しい

「草茫茫として」→繁茂するさま

覧富士記（室町中）：「雲水茫茫たる」

謡曲（15c）：「草茫茫として」2例（井筒・隅田川）、

「風茫茫と」（芭蕉）

「風茫茫たる」（野宮）

連歌論・老のすさみ（1479）：「ぼうぼうとうち覚めたる」

→ぼんやり？

室町物語・酒伝童子絵：「前後茫茫として」

日葡辞書（1603）：「Bóboto. 副詞. 風が音を立てるさま，または，  
耳鳴りがするさま。」

「Böbotoxite. 副詞. 茫然としているさま，または，孤独で寂し  
げにあしているさま. ¶また，遙かに見渡されるさま，または，  
広く遙かなものの形容. ¶また，草が非常に生え茂っているさ  
ま.」

和英語林集成（1867）：「BÔBÔ, バウバウ, 茫茫, adv. Growing and  
spreading over thick and close, as the hair, beard, or grass  
when neglected. *Kusa* —to *oi shigeri michi wakarads*, the grass  
growing up thick the road could not be distinguished. —to *shita  
sora*, cloudy and thick weather.」

『日本国語大辞典』では、「ぼうぼう（茫茫・芒芒）」の語義に5つの  
ブランチを立てているが、最初の「(1)広々としてはるかなるさま。特  
に、水面が遠く広がる湖や海の上についていう。」の初出は『菅家文  
草』（900頃）であり（太平記の「鴨河の水漲出逆浪岸を浸し茫茫（バウ  
バウ）たり」が用例に挙げられているが疑問）、「(3)風や波の音などの  
激しいさま。」が『高野本平家物語』（13c前）「南には蒼海漫々として、  
岸うつ浪も茫茫（バウバウ）たり」であるのに対し、「(2)見たようすが

ぼんやりとしていてはつきりとしなさいさま。かすかなさま。」の初出は『星巖先生遺稿』（1863～65）「今来古往事茫茫、石馬無声抔土荒」となっている。「(4)草や髪などが多く乱雑に生えているさま。苞苞。」は謡曲『井筒』（1435頃）が初出、「(5)物事に対する気構えや考え方がぼんやりするさま。ぼうっとしているさま。茫然。」の初出が『文机談』（1283頃）、『御伽草子・あきみち』（室町末）「是非をも弁へず、ただぼうぼうとして、年月を送り給ひける」もある。先が見えないほどはるかに広がる様子を表す用法から、草むらが生い茂っている様子や広い景色を前に茫然とする様子にも用いられるようになるのは納得できるが、さらに客観的にぼうっとしているさまの描写に使われるのは、その後だろうと思う。ちなみに「茫然」の語は中里（2006）の調査によると江戸期に27例があり、「ぼんやり」は19世紀半ばまで用例がないという。一方で歌舞伎や浄瑠璃台本に「茫然」はなく、和語の「うっとり」「うっかり」が好まれたのではと述べている。「茫々」の意味変化については、劉玲（2004）でも日本語オノマトペ「ぼんやりと」の影響があったとの指摘があり、「茫」の字義の確認も含め、再検討が必要な語群である。

「しんしん」にしても「ぼうぼう」にしても、漢語オノマトペとして用いられていたときの「静かなようす」「はるかに広がるようす・ぼんやりしているようす」を表す用法が、現代語においてはかなり限定的な場面でしか用いられなくなり、「しんと」「ぼう（っ）と」の形で畳語形のもっていた語義を残しているというのは、何か理由があるのだろうか。

### 3. 2. 3. 「<sup>こうこう</sup>耿耿・<sup>こうこう</sup>皓皓・<sup>こうこう</sup>煌煌」

3語とも光り輝くさまをあらわす語だが、『日本語オノマトペ辞典』では別立てしている。「耿耿」は和漢朗詠集に2例、どちらも文集からで、1例は「残灯」に「耿耿」を用い、頭注には「人の心に不安な感じ

を与える明るさ」とあって「ほの白い」感じの光だと思われる。もう1例は長恨歌の中の一節で「星河」、天の川の形容である。謡曲・采女に「耿々たる燈<sup>ともしび</sup>」の1例があるが、文集を典拠とする表現。凌雲集所収の桑原宮作の漢詩では「孤枕撫以耿耿」と、眠れないさまを表す（『詩経』に「耿耿として寝ねられず」とあるのを踏まえるか）。日葡辞書は、「CöCö, 明るい, または, 光りきらめくこと. 例, CöCötaru tomoxibi. 明るくて, よく輝く灯火。」とある。また、読本の近世説美少年録では、「耿々<sup>ほのほの</sup>と明けにけり」とルビを与えている。

「皓皓」は和漢朗詠集に文集から1例（月光）、平家（雲）と太平記（残灯、和漢朗詠集1例目と同詩）に1例ずつ。これも近世説美少年録に「ものも得いはで皓々<sup>じろじろ</sup>と、目を仄<sup>そばだつ</sup>る」というルビがある。

「煌煌」は伊藤東涯の漢詩に「火煌煌タリ」（1703）、山梨稲川の漢詩に「赤日赫トシテ煌煌タリ」（1821）とある。太平記1例（彗星・新星）、英草紙（1749）1例（灯火）、仮名草子の御伽物語「煌々耀々として火もえ出たり」の例があり、先の2語と異なり赤っぽい光にも用いられるようだが、3語の使い分けは今一つはっきりしない。日葡辞書には「Quó quó, 光りきらめくこと, または, 光輝。」とあって「CöCö」とあまり変わらないし、和英語林集成でも「KŌ-KŌ, クワウクワウ, 煌煌, adv. Bright, shiny, clear. -to *shita tenki*, a bright, sunny day.」で、「明るい」とか「輝く」の意である。また、和漢朗詠集や太平記に引かれた白氏文集新楽府の詩句「夜長無眠天不明 耿耿残灯背壁影」からは、ほの暗い光が思い浮かぶが、現代語の「こうこうと光る」は白っぽいかなり明るい輝きをイメージさせる表現である。3種の用字による使い分けも不明になり、「こうこう」は「皓」の字の「白」いイメージ、「煌」の「きらめく」イメージ、さらに[k]音の硬質な印象とが相俟って、原義とは少しずれた日本語オノマトベとしての用法が定着したのではない

だろうか。

3. 2. 4. 「滔滔・湯湯」

『日本語オノマトペ辞典』では「滔滔」に「①水が盛んに流れるさま。多量の水を悠然とたたえているさま。②弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。③おしなべて一様であるさま」の説明を付し、「湯湯」の語義を「広大なさま。広々としているさま。強大なさま。」として区別している。「滔滔」に和漢朗詠集や日本漢詩集の例はないが、十訓抄では文選の詩句を引用した箇所<sup>1</sup>に2例使用されている。他は『太平記』に「滔々たる大海」、謡曲『養老』および『采女』に「水滔々として」2例、『養老』に「谷の水音とうとうと」、『英草紙』に「水滔々」、『近世説美少年録』に「滔々たる水の音」、『浮世床』に「弁舌滔々として」と、計7例である。謡曲の仮名書き例（擬音語）が目を引く。日葡にも「TōTō, 例, TōTōto xite. 湖や池が、水で一杯になり、溢れているさま。」とあり、ここまでは『浮世床』1例が②の意、他はすべて「滔滔」①の意で解せる。また、万葉集3835番歌左注「水影<sup>たうたう</sup>濤々、蓮花灼々」も関連があるかもしれない。

「湯湯」の例は5例である。（色葉字類抄にも「湯々々々々 巍々—」とある。）

日本書紀（720）：「洪恩湯湯ナル」→あまねく広い

菅家文草（900頃）：「湯湯一生」→平穏な一生？

安藤東野（1683～1719）：「北風勁…庭除湯湯」

→風が庭を吹き払うさま？

藪孤山（1735～1803）：「如洪水 湯湯不可抑」

→水が勢いよくほとばしるさま

沙石集（1823）：「湯々瀑々として悪趣を招く」（出典有）

→水が勢いよく流れるさま

和英語林集成の「TŌ-TŌ」は「Onomato. In imitation of the wind. *Kazega - to todomekiwataru.*」となっていて、風の音を写したものという説明である。

『日本語オノマトペ辞典』の説明に合う「蕩蕩」の用法は書紀の例のみで、2例は「滔滔」①に言う「水が盛んに流れるさま。」にあたるようだし、漢詩の2例は水でもなく広大でもなく解釈が難しいが、東野の方は和英語林集成の解釈と共通するところがある。「蕩蕩」は和文における例がなく、日本語には定着しなかった語かもしれないが、「滔滔」は水の勢いよく流れるさまから、近世以降比喩的に人がよどみなく話すさまの形容にも使われ出し、現代語ではオノマトペとして認識されている語と考えられる。

#### 4. おわりに

前節までで挙げた用例からもわかるように、やはり漢語オノマトペは中古和文にはほとんど見られず、軍記物語に同じような用法がまとまって出現するのと、謡曲や近松作品などに多いことが確認できた。近世の作品では、漢語の音読みではなく、語義にあたる読み仮名をつけているものもあり、このような場合はオノマトペとして受け止められていなかった語と考えられるのではないだろうか。小野（2007）の見出し語、225語の漢語オノマトペのうち、新編日本古典文学全集所収の作品に用例があったのは、和漢朗詠集のみに見られたものが2語、他に近世漢詩文も含めて110語である。辞書類では、色葉字類抄が24語を収録、日葡辞書が48語、和英語林集成では初版37語、第二版36語に減っている。日本語文の中での漢語オノマトペの使用は、時代とともに、また文献のジャンルによっても変動したと思われるが、近代小説などでの用例も踏

まえて、どのような語が定着しやすかったのか、和語のオノマトペとの関係性も考えつつ、検討を進めていきたい。また、予想に反して説話系の作品に例が少なく、「オノマトペ」という口語的性格を持つ語彙と、「漢語」という漢文体用・文章語的な語彙とのどちらの要素が強く働いているのかなども、漢語オノマトペの位置づけを考える上で重要な点であろう。

また、用字が異なるいくつかの同音オノマトペは、小野（2007）で別語として掲げられているものであっても、実際の用例ではその区別が截然としない場合が多いが、これについては頼（1964）が、「これらのことばの特徴としては、文字との関係があまり固定的でないという点を挙げるべきであろう」とし、漢詩の中の中国語オノマトペが、漢字の意味とは関係なく音だけを借りているものだと述べていることに注意したい。「森森」と書いても「深深」と書いてもいいということである。日本に伝来してから、逆に漢字の意味に引かれて用法が分かれた可能性もあるかもしれないが、今後の分析では、漢語オノマトペを構成する漢字の、日本漢字音ではなく、原音の持つ響きを念頭に、漢字の意味を離れてそのオノマトペの表現している対象との関係を考えることも重要だと思う。

今回は中間報告の形で、はっきりした結論を示すことはできないが、今後さらに作品別の文体的特徴なども加味しながら検討を重ね、漢詩文に見られるような漢語オノマトペのうち、和漢混交体や和文体の文章中にも用いられるようになって日本語に定着したもの、近世を飛び越えて明治大正の文学作品に現れる語彙などについても、先行研究も参照しながら明らかにしていきたい。



参考・引用文献

- 浅野鶴子（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 阿刀田稔子・星野和子（1993）『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社
- 天野寧（1974）『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
- 井藤幹雄（2000）「表意と表音との間—真名本の擬声語・擬態語の表記をめぐって—」『大阪明浄女子短期大学紀要』第14号
- 小川栄一・劉玲（1998）「漢語と和語のオノマトベ語彙の関わり—「颯々（と）」と「さっさつ」との関係を中心に—」『福井大学教育学部紀要 第I部人文科学（国語学・国文学・中国学編）』第49号
- 小野正弘（2007）『日本語オノマトベ辞典』小学館
- 笈壽雄（1986）「英語の擬音語・擬態語」『日本語学』第5巻7号
- 笈壽雄・田守育啓（1993）『オノマトピア』勁草書房
- 角岡賢一（1993）「日本語の擬似オノマトベ」（笈・田守1993所収）
- 角岡賢一（2007）『日本語オノマトベ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版
- 呉川（1990）「鷗外と漱石の小説に見る漢語のオノマトベ」『相模女子大学紀要（人文・社会系）』第54号
- 中里理子（2000）「明治前期の和語系・漢語系オノマトベについて：『浮雲』を中心に」『上越教育大学研究紀要』第19巻第2号
- 中里理子（2001）「明治後期の和語系・漢語系オノマトベ」『上越教育大学研究紀要』第20巻第2号
- 中里理子（2005）「静寂・沈黙を表すオノマトベ—和語系・漢語系オノマトベの関わりから—」『上越教育大学研究紀要』第24巻第2号
- 中里理子（2006）「オノマトベに見る漢語の影響—和語系オノマトベと漢語系オノマトベの関わり—」『上越教育大学研究紀要』第25巻第2号

中里理子（2011）「延慶本『平家物語』に見られるオノマトベ」『上越教育大学研究紀要』第30巻

飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版

山口仲美（2003）『暮らしのことば 擬音語擬態語辞典』講談社

頼惟勤（1964）「漢語のオノマトペア」『言語生活』第151号

劉玲（2004）「漢語オノマトペの受容に関する研究—A A（ト）型の語の意味変化を中心に—」筑波大学博士（言語学）学位請求論文